

# インターカルチュレーション論

——予備的考察——

君 塚 大 学

## 〔抄 録〕

ヒト・モノ・カネ・ジョウホウのグローバルな交通にともなう、いわゆる文化のグローバリゼーションへの関心も高まってきていて、文化の変容をとらえる概念図式がいろいろ提案されてきた。文化変容、ハイブリッド化、クレオール化、グローカリゼーション、多文化化などである。これらにはそれぞれ欠がある。このノートではこれらに代わるインターカルチュレーション概念を試考する。これは複数の文化圏が相互に影響をもたらすということを主眼している。しかも、その相互変容が文化圏内部のカルチュラル・ポリティックスを経るという点も強調される。

キーワード インターカルチュレーション、カルチュラル・ポリティックス、相互作用、創発

## は じ め に

インターカルチュレーションという用語は専門的にも一般的にもまだ多用されていないようだ。Interculturation という語で EBSCO・Academic Search Elite のフル・テキストを検索してみると 21 件、Sage の Sociology 関係のデータベース検索では 2 件しか出てこない。Google でも 814 件しかヒットしない (2006 年 8 月 29 日の検索による)<sup>(1)</sup>。筆者 (君塚) は Acculturation (文化変容) や Multiculturalism (多文化主義), Hybridization (混淆化) や Creolization (クレオール化), あるいは Globalization といった概念や現象との関連で Interculturation という用語がもっと頻用されていると予期していたが、そうではなかったようだ。

この研究ノートでは、インターカルチュレーションという用語の導入によって、文化の変動にかんする従来の概念用語では必ずしも十分に注目されずに、従ってまた理論化もされてこなかった文化変動の一面を浮き彫りにすることができるようになるのではないかと予想と希望をもって、考察を試みるものである。しかし、考察をどれほど深めることができるか、筆者に

自信があるわけではない。たしかに野心倒れに終わるかもしれないが、冒険的試論を行ってみたい。本論では、最初に文化変動にかんしてこれまで使われてきた幾つかの用語について筆者がいただく不足感ないし不適感をかんとんに記しておく。本来の論文では先行概念の十全な検討が必要なわけだが、このノートでは筆者のアイディアを積極的に開陳することが目的とされているので、先行研究の精確なレビューには踏み込まない。そして、試論的私論の本体にただちに入ることになる。最後に、理論的枠組みがデッサンされれば、この研究ノートの目標に達したことになる。

## 1. インターカルチュレーション概念の必要性

文化変動にかんする社会学や文化人類学でこれまで重要な概念とされてきたものの一つに、文化変容（**Acculturation**）がある。これはある一定の地域の文化が異文化との文化接触をきっかけに変化するという一般的現象を指しているが、これまでの多くの研究では実質的に、研究者によって意識的にか無意識的に後進・退嬰・卑俗・官能・迷妄などとみなされた文化がおもに西洋社会の先進・能動・洗練・理性・開明などとされた文化との接触をへて、西洋文化に部分的あるいは全面的に影響を受けることを意味し、そうした事例を報告するのが実態であった。言い換えれば、文化変容とは事実上、後進文化が先進文化に組み込まれて自己変容するという一方的なヘゲモニーないし権力的現象を指していたのである。

文化変容という専門用語じたいは **100** 年ほど前から頻用されだしたもので、それほど古くはないけれども、例えばいわゆる「資本主義の文明化作用」といった概念を **K. マルクス** が肯定的に懐いていたのは、それよりもさらに **50** 年ほど前のことだったし、この種の観念はもっと遡ってコロンブス的な世界進出の時代にまで辿ることができる。「神の光」をあまねく世界に！というわけだ。後には、こうした宗教的含意は前面から後退し、代わって経済的かつ地政学的な関心が表向きに膾炙されるようになった。この帝国主義の植民地主義的政策を支えるイデオロギーの中核部分に、それを正当化する形で機能していたのが、その種の文明化観念である。この観念は直接的な植民地支配が大勢として終わった時代、**1960** 年前後の時期にいたっても、例えば近代化論や地域研究といった学術分野で否定されることなく息づいていた。文化変容という用語と概念は、そのような文明化観念の学術的洗練を装ったものと言える。

「オリエンタリズム」という概念を提出して、その種の観念と学説を批判した **E. サイド** に諫言されるまでもなく、文化変容という概念と用語は今では援用することができない。文化変容に代わる概念と用語、そしてそれを使った理論的フレームワークが求められている。このノートは、インターカルチュレーションという用語と概念がその代替になりうるのではないかと提案するものである。

たしかに文化変容という概念が今や明らかに不適切となったからといって、ただちにインタ

ーカルチュレーション概念を提案するのは唐突すぎる。文化変容に関連する他の概念用語を検討しておく必要があるだろう。ここではまず、ハイブリッド化という概念を見てみる。ハイブリッドとはもともと生物学関連の用語で雑種を意味していたが、他の分野にも応用されるようになって、例えばハイブリッド・カーなるものも開発されている。性質の異なる諸要素が組み合わせられ新しい性質をもった統体のことをハイブリッドと考えてよい。ハイブリッド化とは、それゆえ、異質な諸要素が混淆ないし融合して新しい質をもった統体が創出するプロセスを意味している。この研究ノートでは、文化に焦点を当てているから、文化に引き付けて言い直せば、ハイブリッド化とは、ある文化圏が他の異質な文化圏と接触するようになり、受容、拒否、調整・折衷、選択・取捨などの過程を経て、以前には見られなかった新しい性質の文化圏が再構成されることである。ただし、ここで言う文化圏ないし文化体系は下位の文化的諸構成要素の統体を含意しているから、ハイブリッド化をこの統体レベルだけで起こると考えるのではなく、下位レベルのある要素においてハイブリッド化が起こると考えてもよい。しかし、その下位レベルのハイブリッド化ではあっても、その新しい要素が他の下位諸要素と統体の関係で新しく持つ意味・意義・機能は以前のそれらとは異なってくるであろうから、この点をも十分に見なければならない。

このような文化のハイブリッド化という用語と概念は、先述の文化変容という見方とは決定的に異なる。文化変容論が文化的先進と後進との優劣関係を前提し、後進文化圏の先進方向への一方的変動を当然視していたのとはまったく異なって、ハイブリッド化という視座はそうした優劣関係を前提的に想定することはない。言い換えれば、文化変容論がサイドのいう意味でのオリエンタリズムに囚われていたのに対し、ハイブリッド化という概念と用語はそれを超えている。この点においてハイブリッド化という視座の方が、妥当性があり望ましいと言える。

けれどもハイブリッド化という見方による諸論に不足点がないわけではない。管見の限りではあるが、そうしたハイブリッド化論の多くは、ある一つの文化圏に注目し、その文化圏が異文化と接触しハイブリッド化する現象のみを研究対象にしている。異文化からの作用と内部的な諸要素の反応・せめぎあいといった過程を克明に分析し、どのような諸ベクトルの効果としてハイブリッド化がなされるかを明らかにする点で、この種のハイブリッド化論は優れた価値をもつものではある。しかし、ハイブリッド化論は、異文化からの作用を論の起点にし、その後の考察の展開では、当の異文化は脇に置かれてしまう。この異文化は、なるほどある一つの文化圏を超える優越性を付与されているわけではないが、この一つの文化圏から当の異文化への反作用があるかないかといった問題関心は初めから排除されてしまっているのである。現在のようなグローバリゼーションの時代にあって、相互に交通する文化圏の間で、たとえ同じ強度のベクトルではないかもしれないが、双方向の作用があるはずであり、いわば両方の文化がハイブリッド化することを想定する、そうした視座が必要なのではないかと思われる。ハイブ

リッド化論は、現象の一方のみに注目した研究であり、この点で考察の狭さに難点があると言わざるをえないのである。

ところで、このようなハイブリッド化論に並ぶ研究にクレオール化論がある。クレオールとはもともとヨーロッパによって植民地化された中南米の地で出生したヨーロッパ人、とくにスペイン系の白人のことであるが、かれらは出自文化からは相対的に離れ原住民文化と一定程度の習合をはたして特有な文化を産出するようになった。その一例がクレオール語であって、英語、フランス語、スペイン語と現地語やアフリカの諸語が融合したものである。こうした、いわば第三の言語は、他の地域でも見られ、ピジン語と一般には言われているようだ。このような言語の生成を典型とする新しい文化の創生を一般的にクレオール化と称して、そうした現象の研究がさまざまになされている。

クレオール化論は、その視座には文化変容論に見られた先見的偏りがない点で、ハイブリッド化論と同様に望ましいものである。しかし、クレオール化論の関心の焦点が出自文化集団から他出した人々による新文化の構成、他出先の文化との接触・交渉を経ての新文化の創出に置かれていて、もともとの出自文化の変動如何は関心外に置かれる。この点でやはり考察の狭さに難点がある。さらに、クレオールという固有名詞を含んだクレオール化という語で、さまざまなタイプの文化変動を一般的に括って議論することにもやはり無理があると言わざるをえない。

それでは、グローバリゼーションないしグローカリゼーションといった概念・用語は使えないであろうか。グローバリゼーションという言葉が一般に通用しているが、グローバリゼーションには必ずと言っていいほどローカリゼーションが随伴しているというのが今では学界で常識になっている。それゆえ、ここではグローカリゼーションという用語を見てみたい。

グローカリゼーションというのは、グローバルなレベルでの文化変動の波が、あるローカルな文化圏に達したとき、なかば必然的にローカルな文化の力が活性化し反作用することを指している。ローカルな文化が少しも活性化されることなく、グローバルな文化要素がそのままの意味を保ったままローカルな文化に導入・定着されるとは考えられていない。そうではなく、ある場合にはグローバルな文化要素がローカルな文化の意味作用によって自文化に適合的な意味を付与されたうえで取り込まれるし、また他の場合にはローカルな文化の強い対抗的反応が起こってグローバルなものが撃退される。これらは極端なケースであって、現実はこの間のどこかに位置することになる。論者によってグローカリゼーションという用語で前者のような親グローバリゼーション的ケースのことを言ったり、反対に後者のような反グローバリズム現象を想定しているようで、そこには種差がある。このノートでは、両極をも含んだ意味合いでグローカリゼーションという語を使うことにする。前者の親グローバリゼーション的現象だけではなく後者の反グローバリズム的な場合も視野に収めるのは、このケースであってももはや従前の自文化をそのまま維持することはないと当事者たちによっても考えられていると思え

るからである。

このような意味をもったグローカリゼーションという用語と概念にもとづいて現在、多くの研究がなされている。しかし、そもそもグローバルな文化とは何なのかははっきりしていないという重大な問題をかかえている。先に「グローバルなレベルでの文化変動」と記したが、ここにも実は難点があったのである。この根本的な概念の困難は、冷戦終結後のアメリカ極支配のもとで、とりわけ9・11後のアメリカによる全世界の軍事的植民地化ともいべき野蛮な政策展開のもとでは、中性的な意味でのグローバル概念は通用しなくなっている。こうした趨勢を目の当たりにして、「グローバル・スタンダードとはアメリカン・スタンダードだ」とか、「アメリカン・グローバリゼーション」といったフレーズが出てきている。グローバルな文化と言っても、そこにはコスモポリタニズム的な賛意がもはや含意されていない。

さらに、グローバルな文化という概念が問題となるコンテキストがある。例えば日本の企業文化が例えばベトナムに一定程度導入されるとき、この日本の企業文化をグローバルな文化とみなすことができるのであろうか。アメリカの企業文化がベトナムへ入っていくときは、どうなのであろうか。あるローカルな文化圏に外から来る文化をすべてグローバルな文化とみなすことには無理があるのは否めない。グローカリゼーション論は、こうしたグローバルな文化という基本的な概念の整理ができていない。そして、その概念的整理を施せば、もはやグローバルな文化という概念は神話的幻想であったと言わざるをえなくなるのではないかと筆者には思われる。実態的に存在するのは、もっと個別的な単位に担われた諸文化ではないのだろうか。

このような問題を引きずっているがゆえに、グローカリゼーション論に安易に与することはできない。たしかにグローカリゼーションという概念・用語にもとづいた興味深い研究が多々あって、それはそれでおおいに知見を豊かにしてくれる。しかし、グローバルな文化とローカルな文化とのせめぎ合いの過程、そしてその所産を分析するといった議論では、グローバルな文化という概念に普遍や進歩、合理や審美といった特権性が刻印されているか、あるいは単なる外来の異文化といった無内容な形式性が与えられているに過ぎないかである。いずれにしろ、グローバルな文化という概念を基軸にしたグローカリゼーション論には本質的な欠陥が孕まれているのである。

次にインターカルチュレーションに近縁すると思われる、多文化化という用語と概念を見ておこう。このノートでいう多文化化とは、多文化主義といった主義主張・立場のことではない。多文化主義の効果か、反多文化主義すなわち同化主義にもかかわらずの効果かは別として、一定の文化圏において種差的な文化系がよりいっそう多く共存するようになるという現象を指して多文化化と呼ぶ。これも文化変動のひとつのパターンであり、しかもヒト・モノ・カネ・ジョウハウが地球大で移動するグローバリゼーションの現代では至るところで観察されることである。それゆえ、各地での文化状況を考察するうえで多文化化という語は便利である。

しかし、社会学的分析にとって、問題がないわけではない。多文化化というプロセスを経

て、質の異なる複数の文化系が一定の文化圏で共存ないしは共生することになるわけだが、そこで想定されているのは種々の文化系の共存・共生であって、それらがハイブリッド化して新しい質をもった新しい文化圏の創発といった可能性が視野から外されている。たしかに新種の文化圏の創出をもたらすハイブリッド化が必然的に起こるとはかぎらない。諸文化系の融合をめざしたはずのアメリカが少なくとも今のところは「サラダボール」にとどまっていて、これを多文化主義ないしは文化多元主義と称して肯定的に評価する向きもある。日本の文化についても「雑種文化」とみなす説（加藤周一）に対して、むしろ「雑居文化」と考えた方がよいとする論（丸山真男）があったほどである。両者の言う「文化」が、その水準を異にしているので、どちらの主張が妥当だとは一概に判定できないが、文化の物質性ではない精神性の面での雑種化は見られないとの論には重みがある。すなわち文化の本質的な部分でのハイブリッド化はたしかに困難だと言えそうである。けれども、その可能性をあらかじめ排除するような概念と用語、ここで言う多文化化という概念と用語をもとにして理論的な枠組みをつくることは避けるべきであろう。むしろ、そのような可能性をも見通すような洞察が理論的にも実践的にも求められているのではないだろうか。

以上、インターカルチュレーションに近縁の用語と概念、すなわち文化変容、ハイブリッド化、クレオール化、グローカリゼーション、多文化化を一瞥してきた。本来は精確かつ詳細に先行研究を検討し、確かな評価を下すべきである。しかし、浅学のせいでそれもできず、しかも自論の提示に気が急いで、一瞥に終始したわけである。次にはすぐに、このノートの本体に移りたい。

## 2. インターカルチュレーション：モデルの素描

### （1）内発的發展論ではない

まず、インターカルチュレーション論は内発的發展論ではないことをコメントしておきたい。これはほぼ自明で説明する必要がないかもしれない。内発的發展という考え方は、たしかに一定の地域・社会（たとえば国家）が比較的閉じられていた時代における文化的熟成を見る場合には有効であったであろう。けれども、越境とかボーダーレス、トランス・ナショナルといった語の流行から、今ではすでにグローバリゼーションの語が定着し 10 数年経っていることが示すように実態もすでにそうなっている。比較的閉じられた文化圏を想定することは、今では意味をなさなくなっている。なるほど、内発的發展論は閉鎖的な文化圏を想定しているのではなく、外発的文化要素の到来があっても主体的な選択取捨と意味転換をほどこしている面を当為的に指摘しているのだと言うのかもしれない。しかし、そうした主体的な対応を「内発的」と言うのはやや強弁の感がある。今では、内と外とを殊更に強調する必要性はなくなって

いるのではないだろうか。そのような訳でインターカルチュレーション論は文化変動の源が内か外かといったことに関心を置かない。むしろ、外からの文化的作用を議論の起点に据えると言った方がよい。

## (2) モデルの前提

このノートでは、一定の文化的体系をもった社会的空間を文化圏という。社会的空間という曖昧な語でいろいろな空間を設定できるであろうが、ここでは国民国家をイメージしながら考えたい。国民国家なるものは、グローバル化の進展とともに機能的重要性を無くしてゆくことはたしかであろうが、ここでは、そうした実態的な動きは一時、棚上げにして、理念型的なモデル構成の手がかりとして国民国家なるものをイメージするのであり、国民国家パラダイムをナショナリスティックに擁護することを含意しているわけではない。つぎにコメントしておくべきことは、文化的体系についてであろう。文化とは抽象的な定義として、一定の集団が共有する価値判断基準であると言える。そして、体系とはそうした基準が複数あってそれらの間に親和的結合性があることを言う。現実には相互の矛盾や齟齬などの不整合性があるが、摩擦やせめぎあいがあるが、理念型モデルとしては親和的統体を前提にする。体系（単に系とも言う）とはそのようなシステムであり、システムは下位要素からなる。ここでは複数の基準が下位要素である。やや具体的に領域化して言えば、経済行為にかんする価値基準（経済文化）、政治行為にかんする価値基準（政治文化）、連帯・統合にかんする価値基準（連帯・統合文化）、生活世界にかんする価値基準（生活世界文化）である。これらの下位文化はそれぞれ、さらなる下位の文化要素に細分することもできる。しかし、ここではこれ以上踏み込まない。さらにコメントしておきたいのは、文化と制度と行為とのつながりについてである。つまり、社会構造の次元として目に見える表層の行為、そして、この行為を一定の方向に統御する制度・規範、さらには制度・規範を正当化しながら整合化する文化をこのモデルは前提にしている。図式的に言えば、行為 $\Leftrightarrow$ 制度 $\Leftrightarrow$ 文化といった構造的機能次元を前提にしているのである。したがって、このモデルにおける社会空間は4つの領域を行、3つの次元を列とした行列空間になぞることができる。

## (3) モデルの初期条件

ここでの仮想モデルは、もっとも単純なものを考える。文化の担い手をここでは個々人とし、法人や集団を想定しないことにする。文化圏  $A$  は初期  $T_0$  において  $n$  人の成員中  $i$  人が文化系  $a$  を共有しており、その他の成員は文化系  $\alpha$  を共有しているとする。これは  $At_0 = \{a_1, a_2, a_3, \dots, a_i, \alpha_{i+1}, \dots, \alpha_n\}$  と記せよう。ここで  $i > n/2$  とする。つまり  $A$  では文化系  $a$  が多数派を占め、 $\alpha$  は少数派であり、二つの文化系がせめぎあっているとす。同様に、文化圏  $B$  を考える。 $Bt_0 = \{b_1, b_2, b_3, \dots, b_j, \beta_{j+1}, \dots, \beta_m\}$  であ

り、 $j > m/2$ である。現実はいっと複雑であろう。文化系が二種ではなくもっと多いだろうし、文化系どうしでせめぎあっているというのも程度は様々なはずだ。しかし、モデルの初期条件として上のように考えておく。

#### (4) 相互作用

今、時間  $T_0$  で文化圏  $A$  と  $B$  が接触し、一定の時間を経た  $T_1$  まで相互作用が続くとする。接触がどのような形をとるのかは経験に開かれている。武力によって一方的に関係が始まるケースから、尊敬や憧憬の念をふくんだ平和的交流のケースまでいろいろあるはずだ。また相互作用についても様々なタイプが現実にはある。相互性と言ってもほとんど一方的なものから、十分に互角な影響関係まであるし、作用も威嚇・強制的なものから、コミュニケーション的交渉までいろいろである。このモデルでは、 $A$  と  $B$  をもつ二つの社会を前提にしているから、それぞれの社会が打ち出す作用に注目して、4つの相互作用タイプが考えられる。つまり、① $A$  社会が威嚇、 $B$  社会も威嚇の相互威嚇タイプ、② $A$  が威嚇、 $B$  がコミュニケーションの一方的強制タイプ、③ $A$  がコミュニケーション、 $B$  が威嚇の、これも一方的強制タイプ、④ $A$ 、 $B$  ともにコミュニケーションの相互コミュニケーションタイプである。現実はいこれらの間のどこかに同定できよう。いわゆる西洋社会の非西洋社会にたいする帝国主義的インパクトは一方的強制タイプに近かっただろうし、現今のアメリカの世界政策はこれそのものである。これに対し、イランの  $M$ 。ハタミ師が大統領職に就いていたとき主唱した「文明間の対話」は相互コミュニケーションタイプであったが、成就是なかった。

さらには、作用点を考えておく必要があるようだ。作用は文化系全体に一樣に働くというより、ある下位領域の文化要素に効果的に働き、他の要素には影響がほとんどないといったことがありうる。少なくとも作用の時間的経過が長くないときに、その種の作用格差が起こることがある。いわゆる非西洋社会の近代化論では経済文化の変化が他の下位文化よりも先に進捗するとみなされている。これは文化遅滞とも言われている。しかし、われわれのモデルでは、下位文化が遅滞しながらも結局は近代化のベクトルに整合化すると必然視するのではなく、条件によっては変化しないケースもありうると考えておきたい。経済の近代化が必ずしも世俗主義化を随伴するとはかぎらないといったことをモデルに収めたいからだ。

#### (5) 内部のカルチュラル・ポリティックス

文化圏の接触を契機にして始まる相互作用をモデル化するとき、さらに考慮する必要があるのは、文化圏内部のカルチュラル・ポリティックスである。外からの作用をきっかけに内部での文化政治的過程がどのように展開され、どのような結果が創出されるのかといった内部過程の分析枠組みが必要となってくる。例えば文化圏  $A$  は時間  $T_0$  で文化系  $a$  が多数によって担われており優勢である<sup>(2)</sup>が、少数・劣勢ながら文化系  $b$  が存在している。この  $a$  と  $b$  が多



文化主義的に共存・共生しているのか、ヘゲモニー争いを展開しているのかを想定すべきであろう、現実はその間のどこかであろうが。この状況に外からの作用が加わった場合、どのようなのだろうか。エージェント個々人で反応は異なるはずであるが、このモデルでは、文化系の集団レベルで考えることにしよう。

共存・共生関係にある **a**, **b** はこの関係を保持したまま双方とも対外宥和か対外抵抗を形式的にはとりうるし、また一方が対外宥和で他方が対外抵抗をとりうる。あるいは **a**, **b** が外的作用を機に共存・共生関係から競合関係に変わりつつ、双方とも対外宥和か対外抵抗をとるか、また一方が対外宥和で他方が対外抵抗をとりうる。**a**, **b** が対外宥和になるか対外抵抗になるかは、外的作用が自らにとって近縁的で加勢的であるかどうかの程度によるはずだ。現実はこのような単純な形式性で捉え切れるはずもないが、分析枠組みの一端として利用はできると思われる。例えば、幕末の「黒船」に対する尊王攘夷と佐幕開国との関係、「イスラエル」に対するイスラーム主義とアラブ世俗ナショナリズムとの関係などの分析に使えないだろうか。

文化圏内部のカルチュラル・ポリティックスを考慮する際に今ひとつ止目すべき点がある。ポリティックスの手法である。これも細かく考えるべきことがたくさんあるが、ここでは大枠を示すに止めたい。しかも、同類のタイポロジーがすでに記されている。先の相互作用のタイプの説明箇所、相互威嚇タイプ、一方的威嚇タイプ、相互コミュニケーションタイプを挙げた。これらをこの内部的カルチュラル・ポリティックスの分析にも援用できるだろうということである。

## (6) 作用の効果

以上のような接触と相互作用を経て、時間 **T1** において文化圏 **A**, **B** はどのように変化した、ないしは変化しなかったと考えることができるであろうか。**A** について①まず変化なしの場合、 $At\ 1 = \{a\ 1, a\ 2, a\ 3, \dots, a\ i, \alpha\ i+1, \dots, \alpha\ n\}$  である。これを文化系 **a** がドミナントな文化圏 **A** として、**At 1 a** と記そう (以下でも同様な表記をする)。これは理論的にあまり興味深いものではないが、モデルには入れておく。②**B** の影響が強力で **A** 社会の成員の相対多数が文化系 **b** を受容した場合、 $At\ 1\ b = \{b\ 1, b\ 2, b\ 3, \dots, b\ i, a\ 1, \dots, a\ j, \alpha\ 1, \dots, \alpha\ k\}$  で、ただし  $i > j, i > k, i+j+k=n$  である。③相互作用の結果、**a** でもなく **b** でもない文化系 **c** が創発し、相対多数の成員に担われるようになった場合、 $At\ 1\ c = \{c\ 1, c\ 2, c\ 3, \dots, c\ i, a\ 1, \dots, a\ j, \alpha\ 1, \dots, \alpha\ k\}$  で、ただし  $i > j, i > k, i+j+k=n$  である。

**B** の変化についても同様に考えることができる。すなわち、①変化なしの場合、 $Bt\ 1\ b = \{b\ 1, b\ 2, b\ 3, \dots, b\ j, \beta\ j+1, \dots, \beta\ m\}$  である。②**A** の影響が強力で **B** 社会の成員の相対多数が文化系 **a** を受容した場合、 $Bt\ 1\ a = \{a\ 1, a\ 2, a\ 3, \dots, a\ j, b\ 1, \dots, b\ k, \beta\ 1, \dots, \beta\ l\}$  で、 $j > k, j > l, j+k+l=m$  である。③相互作用の結果、**a** でもなく **b** でもない

文化系  $d$  が創発し、相対多数の成員に担われるようになった場合、 $Bt\ 1\ d = \{d\ 1, d\ 2, d\ 3, \dots, d\ j, b\ 1, \dots, b\ k, \beta\ 1, \dots, \beta\ l\}$  で、 $j > k, j > l, j + k + l = m$  である。

ここで  $A, B$  双方の 3 つの結果を組み合わせてみる。3×3 の 9 タイプが形式的には考えられる。①  $At\ 1\ a$  と  $Bt\ 1\ b$  の組み合わせで、これは双方不変型と言えよう。同様に②  $At\ 1\ a * Bt\ 1\ a$  で、 $A$  優越型。③  $At\ 1\ a * Bt\ 1\ d$  で、 $B$  変動型。④  $At\ 1\ b * Bt\ 1\ b$  で、 $B$  優越型。⑤  $At\ 1\ b * Bt\ 1\ a$  で、交換型。⑥  $At\ 1\ b * Bt\ 1\ d$  で、 $B$  優越的自己変動型。⑦  $At\ 1\ c * Bt\ 1\ b$  で、 $A$  変動型。⑧  $At\ 1\ c * Bt\ 1\ a$  で、 $A$  優越的自己変動型。⑨  $At\ 1\ c * Bt\ 1\ d$  で、双方変動型と呼べよう。

この 9 タイプのうち特に興味深いのは、⑤の交換型、⑥と⑧の優越的自己変動型、そして⑨の双方変動型である。⑤の交換型は、しかし、現実性があるとはなかなか思えない。⑥は  $B$  の文化系  $b$  の影響力が強く  $A$  の主要な文化系を  $b$  に変えつつ、 $B$  自身も変わるタイプである(⑧は逆タイプ)。このモデルでは  $B$  は  $A$  以外からの外的作用が考えられていないから、 $B$  の自己変動は内的な文化系  $b$  と外的な文化系  $a$  との相互作用から新しい文化系  $d$  が創出したのだと見なさざるをえない。⑨の双方変動型はもっとも興味深い。 $a, b$  それぞれが新しい  $c, d$  を生み出すケースであるが、しかし、これは現実性をもつか疑われる。

ところで、これら 9 タイプには入っていないが、理論的にも実践的にもきわめて重要だと思われる組み合わせがある。 $A, B$  の双方とも元の  $a, b$  とも違う新しい文化系  $e$  を共有するようになるタイプである。これは、 $At\ 1\ e = \{e\ 1, e\ 2, e\ 3, \dots, e\ i, a\ 1, \dots, a\ j, \alpha\ 1, \dots, \alpha\ k\}$  で、ただし  $i > j, i > k, i + j + k = n$  であり、 $Bt\ 1\ e = \{e\ 1, e\ 2, e\ 3, \dots, e\ j, b\ 1, \dots, b\ k, \beta\ 1, \dots, \beta\ l\}$  で、 $j > k, j > l, j + k + l = m$  である。⑩  $At\ 1\ e * Bt\ 1\ e$  と記せる。この文化系  $e$  は  $A, B$  に共有されている。文化系が共有されるのは先の②  $At\ 1\ a * Bt\ 1\ a$  として、また④  $At\ 1\ b * Bt\ 1\ b$  としてあった。しかし、これら 2 タイプの共有性はどちらか一方の優越的作用の結果であった。それに対して、この共有文化系  $e$  は  $A, B$  相互の作用過程と内部的カルチュラル・ポリティックスの二重性を経たところの新創発文化系である。②と④の共有性は既存の特殊が一定の普遍性を占有したことだといえるのに対し、⑩の文化系  $e$  の共有性は新しく創出された純粋な普遍性そのものだと言える。②と④の場合、その普遍性にかんする僭称性の疑義が、相互作用タイプにも依るから必ずというわけではないが、付きまとう。②④と⑩はいわば普遍的文化系を保有することになり、文化圏  $A$  と  $B$  の種差性は実勢上、きわめて薄くなる。ここでの単純な二項モデルを一気にグローバル・モデルに駆け上がることが許されるならば、この普遍的文化系はグローバルな文化と言えるかもしれない。しかし、今現在の「グローバルな文化」が神話的幻想であることは先にも記した。

## (7) 複数回ゲーム

時間  $T\ 1$  で相互作用が収束する②  $At\ 1\ a * Bt\ 1\ a$  と④  $At\ 1\ b * Bt\ 1\ b$  と⑩  $At\ 1\ e * Bt\ 1\ e$  は

別として、他の①At 1 a\*Bt 1 b, ③At 1 a\*Bt 1 d, ⑤At 1 b\*Bt 1 a, ⑥At 1 b\*Bt 1 d, ⑦At 1 c\*Bt 1 b, ⑧At 1 c\*Bt 1 a, ⑨At 1 c\*Bt 1 d は第2回目の相互作用ゲームを展開する。文化系の取りうる値域がどれほどのものかによって収束するまでのゲームの計算上の回数は決まってくるのであろうが、文化系を構成する文化諸要素を先述のように4領域に限定し、これらの取りうる値域をいくつか数えるほどに限定したとしても、文化系の取りうる値域、言い換えれば文化系タイプは計算上、気の遠くなるほどある。したがって、相互作用も気の遠くなるほど繰り返されることになる。これは計算上のことだが、現実でもやはり「神々の永遠の闘争」(M. ウェーバー)といった観察がある。

ここでは、単純なモデルということで、4領域の文化要素それぞれが下位要素を持つことなく、二つの値しかとらないという仮定で思考実験してみよう。例えば、経済文化として自由競争主義と統制平等主義。現実的に経験するのは、この中間値であろうが、ここではこのように仮想するのである。政治文化としては権威主義と民主主義、連帯・統合文化として帰属主義と個人主義、生活世界文化として世俗主義と聖化主義、というようにである。このように単純化してみると、ありうる文化圏パターンとして、 $2 \times 2 \times 2 \times 2$  の16とおりある。このように文化圏の値域が16に限定されると、相互作用が収束するまでに必要なゲームの回数はどれほどなのか。ここで正確な計算はできないが、それほど膨大ではない感がある。さらに現実の歴史的趨勢に頭を戻して考えてみると、収束までの回数(というよりも、この文章内では、時間と言うべきか)は、気の遠くなるほどでもないと思われる。

とは言え、先にも記したように、収束をもたらず手立てが威嚇的かコミュニケーション的かによって収束の安定性は変わってくる可能性を考慮すると、威嚇によってもたらされた収束は、その共有化された文化系の普遍性への疑義提起によって、再び流動化することがありうる。このように考えると、やはり収束は容易くない<sup>(3)</sup>。

## (8) グローバル・モデル

上で議論してきたモデルは文化圏 A と B から成る単純な二項モデルにすぎない。現実にも目を向ければ、このモデルでは歯が立たないことは自明の理だ。グローバル・モデルを仮設しようとするのであれば、多項モデルを設定しなければならない。しかし、筆者には手が届かないので、その必要性を自覚するのみである。ここでは二項レベルから一挙にグローバル・レベルにジャンプして、しかもインターカルチュレーションが収束した場合を空想してみよう。これは究極とも言うべき状況である。そこでは共有文化系が普遍性をもって存立している。これを文化系  $x$  と記そう。上の(6)「作用の効果」の最後の部分で二項モデルでの収束状態の説明の際に触れたように、ここでも文化系  $x$  の普遍性の主張には僭称性の疑いがかけられることがありうる。もちろん、 $x$  はオーセンティックな普遍性を認められることもある。この場合、 $x$  は字義通りのグローバルな文化系と言える。前者の場合は、その僭称性疑義のため、 $x$

はグローバルな文化系と言えたとしてもカッコ付きであろう。

ここで更に、注視したいことがある。二項モデルの場合もそうであったが、ここで想定している収束状態とは、各文化圏で  $x$  がマジョリティによって担われている状態のことである。したがって、各文化圏にはマイノリティが担う文化系（複数の可能性アリ）が生きている。それゆえ、各文化圏の内部ではカルチュラル・ポリティックスが機能している。つまり、インターカルチュレーションの次元では収束状態にあっても、各文化圏の次元ではゲームが収束していないのである。これは、インターカルチュレーション次元の収束状態は終極状態を意味しているわけではないことを含意している。と言うのも、各文化圏内のカルチュラル・ポリティックスが圏内の文化変動をもたらし、ひいてはそれがインターカルチュレーションを活性化させる源になりうるからである。たしかに、各々の文化圏でのカルチュラル・ポリティックスの収束として全メンバーによる単一の文化系への支持が成り立ちうるが、それはあくまで形式論理上のことである。経験的な現実味を考慮して、このモデル化では、文化圏内でマイナー文化系（複数の可能性アリ）が、タイプを維持しつつか変更しつつかは別として、存続することを想定しているのである。したがって、マイナー文化系の勢力増大によってメジャー文化系に取って代わるといったカルチュラル・ポリティックスを経て、インターカルチュレーションを流動化させる可能性が残ることになるわけである。

更にもう一点、止目しておきたいことがある。インターカルチュレーションが終極ではないが一定期間の収束的均衡状態になったとき、文化圏の圏的性格、言い換えれば境界の性質をどのように考えるのが妥当か、という問題である。二項モデルの収束について先の（6）でコメントした際、文化圏 **A** と **B** は実質的に種差性がなくなると記した。これは境界がなくなる、あるいは圏的性格が消滅することだとも言える。このことがインターカルチュレーションの収束状態の場合にも言えるのであろうか。たしかに、この収束状態のマクロ・レベルを鳥瞰的にみると、境界はないに等しい。けれども、ミクロ・レベルをやや虫眼的にかつ比較視点でみると、差異が、多大か寡少かは別として、存在する。したがって、文化圏を区別する境界があると言える。それゆえ、こうしたマクロでの同種性、ミクロでの種差性を孕んだ収束状態は、二つのレベルの構造をもつと考えておくしかない。すなわち、グローバルな同質的文化系  $x$  を共有するマクロ構造とローカルな種差的文化系を個有するミクロ構造との二層である（4）。

このとき、一種、奇妙なパラドックスがおこる。と言うのも、それぞれの文化圏は、マクロ構造に属するマジョリティ文化系  $x$  によって自らのアイデンティティを表出することができず、ミクロ構造を担うマイノリティ文化系に依拠することによってでしか、個有的種差性としてのアイデンティティを表すことができないからである。言い換えれば、文化圏はマジョリティ文化系によって代表することができても、他との種差を示すべきアイデンティティを表出することはできないからである。この場合、文化圏の間ないしはグローバルなレベルで、尊敬

や威信の評価関係はどうなるのだろうか。ある文化圏が威信をもてたり尊敬されたりするのは、マクロ構造における他の文化圏との同質性によってであろうか、それとも、ミクロ構造における他の文化圏との異質性によってであろうか。すべての文化圏が同一の文化系  $x$  をマクロ構造において共有している場合、同じ文化系をもつがゆえに尊敬されたり威信をもてたりするなどとは考えにくい。むしろ、それは当然にして普通のことであろう。他から良く評価されるのは、種差性のゆえであるはずだ。そうであれば、文化圏の尊敬・威信はミクロ構造のマイノリティ文化系に依存することになる。これはとりもおさず、マイノリティ文化系はその文化圏を代表することはできないにしても、その尊敬や威信の機能的主体となるということである。代表なるものが評価の源泉でもあるといった感覚からすれば、これは奇妙なパラドックスである。こうしたパラドックス、すなわちマクロにおけるマジョリティの代表性とミクロにおけるマイノリティの尊敬・威信の源泉性との一種のねじれ、このねじれの復元力の現われとして、新たなカルチュラル・ポリティックスが始動するかもしれない。ただし、これは、既述のように、インターカルチュレーションの収束状態といった極端な仮想状況で想像できる事柄であって、経験的現実の射程にあることではない。

### 3. ケース・スタディへの一步

以上はインターカルチュレーションの理念型的なモデル化の仮想実験であった。以下では、そのモデルを念頭に置き、経験界の現象を一瞥する。

インターカルチュレーション論とは文化圏の間での相互作用を経た相互変転の考察だと言われれば、それはあの「文明の衝突」論や「文明間の対話」論と何か関係するのか、関係するとすればどのような関係なのか、といった疑問を浮かべる向きもあろう。ここでは、これに関連して少しばかり洞察してみよう。

現代のイスラーム・シーア派(12 イマーム派)は16世紀サファヴィー朝による国教的扱いによって地盤が固められたといわれる(異論がありうるが、この説を採っておく)。この王朝は18世紀初めに解体、爾後の群雄割拠を経て、その世紀の終わりにはカージャール朝になった。そして、この王朝も20世紀の初めにはパフラヴィー朝に取って代わられるように、政体の変転はあれ、民衆のシーア派信仰は持続した。カージャール朝の後期には北からロシアが、南のペルシア湾からはイギリスが植民地化の魔手を延ばし、各種の利権を篡奪するといった侵略が続いたが、1890年の、イギリス人へのタバコ利権の譲渡に抗議したタバコ・ボイコット運動ではシーア派ウラマーが大きな役割を担ったとされる。もちろん運動はウラマーの言論に終始するのではなくシーア派民衆による大規模デモが繰り広げられたわけで、宗教的な活性があったと言える。こうしたなかで、1905年には更に、憲法制定と議会開設を求める運動が起こり、制定された基本法には「国家の権力は国民に由来する」といった条文が入り、アジア初

の民主的憲法ができ、議会も開設されるようになった。けれども、王朝の統治能力は潰滅的で、軍人パフラヴィーによって体制変換された。このパフラヴィー朝は西洋流の世俗的近代国家建設をめざし、近代的諸制度を導入、ヘジャブの禁止（反対が強くすぐに撤回したが）などイスラームを抑止する政策を展開してゆき、**1960年代**にはアメリカ CIA の「支援」のもとで宗教勢力の弱体化をねらった「白色革命」を断行した。これに忍耐強く抵抗し、ついにはイラン・イスラーム革命を導いた有力者のひとりが、アーヤットラー・ホメイニーだった。再建されたのはイラン・イスラーム共和国である。後でも触れるが、注意したいのはこれが〈共和国〉であることだ。そして、それがイスラーム、すなわちシーア派という特質も兼ね備えていることが意味深いのである。

これはシーア派イランの粗述にすぎないが、インターカルチュレーション論的関心から再解釈できる。シーア派の公定宗教化は、シーア派有力部族の王朝への取り込み、周辺のスンニ派王朝との対抗関係などの条件下で内的なカルチュラル・ポリティックスや外的なインターカルチュレーションを経て、なされたはずである。このときのインターカルチュレーションは空間的にはやや狭いもの、すなわちシーア派文化圏とスンニ派文化圏との間でなされたにすぎなかった。しかし、**1900年前後**の動きはいわゆるウェスタン・インパクトへの反応であり、インターカルチュレーション的作用（このときは一方的な刺激であった）を契機にカルチュラル・ポリティックスが展開され、西洋志向の世俗近代主義勢力が聖化保守主義勢力を抑え、結局、インターカルチュレーション過程は西洋優越型になった。このときの両過程すなわちインターカルチュレーションとカルチュラル・ポリティックスの両方ともコミュニケーションタイプというよりも威嚇タイプであっただろうと思われる（検証の必要性は言うまでもない）。

**1979年**のイスラーム革命はどうであろうか。世俗近代化の徹底を図る「白色革命」に対するシーア派聖化主義の不退転的抵抗といったカルチュラル・ポリティックスをベースに、これに周辺諸社会での状況、すなわちアフガニスタンやイラクなどでの世俗社会主義化への傾勢、イスラエルの不当占領の持続といった状況に対する危機対応としてのイスラーム主義が加わって、イスラーム革命が成就したと言える。パフラヴィー体制が大筋で自由競争主義、権威主義、個人主義、世俗主義の文化系を指向していたのに対し、シーア派イスラーム革命は統制平等主義、〈民主主義〉、帰属主義、聖化主義の文化系を選好したと図式化できる。これは単純に過ぎるという謗りをうけるだろう。考察を彫琢すべきことはたしかだが、筆者の能力不足で、これ以上踏み込めない。ただ、一言コメントするとすれば、それは〈民主主義〉についてである。この政治文化は基本的に、最終最高の立法主権はアッラーに帰属される、そして、その主権執行権がウンマに付与されるが、これはシャリーア制定権とシャリーア執行権に分かれる、そして、前者の制定権の最終責任は最高位のイスラーム法学者が負い、この原則を超えない限りでの民主主義的政治参加が大統領選挙や議員選挙での国民の直接選挙というかたちで認められるものである。ここでは、法学者支配（ヴェラーヤテ・ファキーフ）が民主的参加によ

って補完されている。いわゆる西洋流の民主主義とイスラーム統治文化とのハイブリッドと言えなくもない。政治文化におけるインターカルチュレーションの所産である。

さて、話を急ごう。一定の成功をおさめたシーア派革命は次なるラウンドのインターカルチュレーションを触発する。それはまず、周辺文化圏とであり、さらには西洋文化圏とである。鼓吹された「革命の輸出」に危惧したイラクのサダム・フセイン政権はイランに戦争をしかけ、内部ではシーア派の興隆を抑圧した。フセイン政権の目標は十分に達成されなかったけれども、この間のアメリカ、フランスなどの大量破壊兵器「支援」で軍事大国化したイラクはその威を借りてクエートに侵攻、湾岸戦争を招いた。不利になったフセインは、スンニ・イスラーム主義者から、そしてアラブ民族からの支持を求めて、突如、敬虔なムスリムを装いだし、イスラエルへの攻撃をも冒した。これは一定の効果を得た。つまり、イスラーム主義的意識か、民族主義的意識かは判然としないものの、そうした意識を基に反アメリカ感情を醸成したわけである。そして、これを強化したのが二つの聖都の地サウジアラビアへのアメリカ軍の駐留であった。こうして、シーア派革命が引き起こしたインターカルチュレーションは、グローバルな政治的軍事的戦略と連動して、いわゆる「文明の衝突」的緊張関係をもたらす一要因になったのである。

この緊張関係は最悪のかたちで9・11を起こし、さらに極悪なイラク侵略戦争をもたらし、インターカルチュレーション的にもむしろ退行をきたした。相互に自己閉鎖の傾きがあるのである。一方でのキリスト教原理主義の狂信化と他方でのイスラーム原理主義の跋扈がその退行現象の典型である。これらは、たしかに双方における少数派である。しかし、それに少なからず心情を寄せる大衆が広い裾野をなして下支えしている面もあることを見逃してはならないであろう。アメリカのキリスト教原理主義は今のところヨーロッパに飛び火することはないであろう。ヨーロッパは世俗性を維持しているが、その世俗ヨーロッパ社会の内部に移動したムスリム／ムスリマたちがイスラーム原理主義と呼応し、世俗主義（スカーフ禁止、イスラーム蔑視マンガなどはその表層現象）に対して武力攻撃を冒しているのが現状である。ここでのインターカルチュレーションの構図は大略すると、イスラーム主義文化圏とヨーロッパ世俗主義文化圏とアメリカキリスト教文化圏とのいわば三つ巴のヘゲモニー争いである。言うまでもなく、イスラーム主義文化圏には原理主義的な文化系や世俗指向の文化系が競争しているし、ヨーロッパ世俗主義文化圏にはカソリック文化系やプロテスタント文化系が息づいている<sup>(5)</sup>。アメリカキリスト教文化系にも世俗指向のリベラル文化系があり、勢力を競っている。「文明の内なる衝突」をも視野に収めるべき所以である。このノートでの用語法では、カルチュラル・ポリティックスとインターカルチュレーションの二重性において分析が必要だということである。

## お わ り に

あまりにも粗い議論に辟易の向きもおられたであろう。ひとえに筆者の浅学の故である。今後、緻密にするためには多くの論点を究める必要がある。ここで1, 2挙げておきたい。ひとつには、文化系の構成要素の再考、再整理である。このノートでは4つの領域に分けただけだった。これはパーソンズの古いAGIL図式に乗っているが、これは妥当か。これが妥当としても、その変数が二項対立的だとみなすのは単純すぎる。その変数はもっと多元的に、そしてそれぞれを定性的にというよりも定量的に考える方が適切なのかもしれない。さらに、このノートでは、4領域の文化要素は互いのどれとでも結びつくことができる、言い換えれば完全な適応性をもったモジュールのようにみなしたが、それらは種差的選択性ないし結合の親疎性は本当はないのか、再考する必要がある。

ふたつには、文化圏内のマジョリティ・マイノリティにかかわる問題である。このノートでは、文化圏のマジョリティ文化系、代表性をもつ文化系をその担い手である人間の頭数の相対多数で決められるとみなした。ひとりの人間が文化を担う力は誰でも同じとみなしたわけである。モデル化のこの条件は現実味のある条件だろうか。理念型モデルは現実を模写するものではまったくなく、現実に関わる必要はないが、かといって、あまりにも現実離れたモデルは現実分析の用を足さない。ある程度の現実味のある条件に基づいたモデル化が必要である。この点で、文化のパフォーマティヴィティを誰でも同じとみなすのは問題だ。これは読み書きリテラシー、学歴、文化資本、保有資源などを整理してパフォーマティヴィティの点で個人々人をウェイト付けるのが妥当なのか考える必要がある。

### 〔注〕

- (1) ちなみに Sage の検索で出てきたのは *Bibliographie sur la sociologie de la papauté*, Zizola, Giancarlo, *Social Compass*, vol. 36, no. 3, pp. 355–373, September 1989 と *International Migration and Ethnic Minorities: New Fields for Post-War Sociology in the Federal Republic of Germany*, Wilpert, Czarina, *Current Sociology*, vol. 32, no. 3, pp. 305–352, December 1984 の二つの論文である。論題からすると前者はローマ法王に関する社会学的研究のための書誌調査のようだ。後者は戦後ドイツ社会学の新しい課題として移民・マイノリティ問題に取り組むべきだというものである。
- (2) ここでは優劣を担い手（エージェント）の多寡で単純に評している。これは、各人が同等の文化的影響力・ヘゲモニーを有していることが前提されている。しかし、この前提は現実性に乏しい。この問題性について、ノートの最後でいま一度触れる。
- (3) 実はこの相互作用に援用される手立ての問題は、言い換えればゲームの規則、インターカルチュレーションのルールをめぐる、一種のメタレヴェルの問題である。インターカルチュレーションのモデル化においては、そもそもこのメタレヴェルの問題をも組み込む必要がある。圧倒的な武力によって「自由」を強制するといったデタラメが臆面もなく遂行され、戦犯法廷に起訴されることもな



くまかりとおっている不条理な現実、このメタレヴェルのルールが野蛮大国によって傲岸に扱われているからである。このような状況であるからにはなおさらに、メタレヴェルのルール形成が問題化されなければならない。J. ロールズの「万民の法」という概念がひとつの手がかりになると思われる。

- (4) 文化圏におけるこの構造的二層性は、文化のグローカリゼーションの議論にとってキー概念になるはずである。文化のグローバリゼーションによって地球上のどこも同じ文化になってしまうのかといった軽率な危惧を、この概念によって鎮めることができるであろう。
- (5) ヨーロッパを世俗主義と特徴づけたが、このノートの脱稿後、ローマ法王ベネディクト16世のイスラーム野蛮視発言が問題となった(2006年9月中旬)。教皇庁のあり方によってはヨーロッパにカソリック至上主義が、ムスリム移民との関係のなかで胎動しないともかぎらない。インターカルチュレーションの理論化という関心は別にして、現実的生活では憂慮せざるをえない。

〔文献〕

- ハンチントン, S. 1998『文明の衝突』(鈴木主税訳) 集英社  
ハタミ, M. 2001『文明の対話』(平野次郎訳) 共同通信社  
加藤周一 1979『加藤周一著作集7 近代日本の文明史的位置』平凡社  
丸山真男 1961『日本の思想』岩波書店  
ロールズ, J. 2006『万民の法』(中山恵一訳) 岩波書店  
サイード, E. 1986『オリエンタリズム』(今沢紀子訳) 平凡社  
ウェーバー, M. 1936『職業としての学問』(尾高邦雄訳) 岩波書店

(きみづか ひろさと 現代社会学科)  
2006年10月19日受理

